

「グラミン銀行とマイクロクレジット」

笠原清志(立教大学教授)
ナシル・ジョマダル(立教大学兼任講師)

1. グラミン銀行とは？

「グラミン」はベンガル語で「農村」という意味である。グラミン銀行の全ての活動が農村を中心に行われていることは「農村バンク＝グラミンバンク」という名前にも表れている。今では世界的にも「グラミンバンク＝グラミン銀行」と呼ばれるようになった。グラミン銀行のマイクロクレジット(小規模融資)の対象者は土地を持っていないか、殆んど持っていない村人達である。彼らは貸付金を受ける為に5人組を形成する。グループメンバー(ボロワー)は同じような教育、経済的状況、社会的背景を持たなければならない。家族が0.5エーカー以下の耕作地しか持たない人、あるいは家族が1エーカーの土地を持っていて、それがその地区で中程度の価値を持っていても、実際の市場価値に満たないという人であれば誰でも収入向上・営利活動をする為にグラミン銀行からマイクロクレジットを受ける資格がある。

メンバーはお金を借りる前にグラミン銀行の考え方、規則、手順について1～2週間のトレーニングを受けなければならない。そして、グループとして認められる為に口頭試験に合格しなければならない。新しいメンバーになるためにグラミン銀行の規則(16原則)や手順を理解し、自分の名前が書けるようになり、その誠実さや真剣さでグラミン銀行のスタッフを納得させなければならない。各グループはリーダーと補佐を選出する。参加を義務づけられた全てのメンバーを毎週のミーティングに参加させるようにするのが彼らの仕事である。同じ村で構成された6～8グループが集まったもの(30～40人で構成される)で村毎にセンターを構成する。グループリーダーの中から「センターチーフとチーフ補佐」が選ばれる。彼らは毎週センターミーティングを仕切り、貸付金の申し入れを伝え、メンバーの活動状況を把握して、グラミン銀行のワーカー(行員)の仕事を手伝っている。このセンターが村レベルでのグラミン銀行の活動のベースになっている。銀行のメンバーはセンターを通して金を借り、生活改善や自立の為に様々な収入向上活動を行う。

2007年5月の時点で、78,101の村の人々が1,133,482のグループと127,438のセンターを通してグラミン銀行を利用し、バングラデシュの8割以上の村で700万人がグラミン銀行から無担保でマイクロクレジットを受けている。グラミン銀行のワーカーは毎週お金を回収し、メンバーの経済活動や生活改善状況を把握する為に朝から晩まで自転車で村から村へと走り回っている。グラミン銀行の規則では行員全員が一日中村で活動する事になっている。勤務時間に行員が支店にいる場合、銀行の規則では働いていないと見なされることになっている。ただし、昼下がりに一度だけメンバーにお金を貸す為に支店に戻ることが許されている。127,438のセンターを、全国にある2,422支店(Branch)オフィスが管轄する。これらの支店をエリア(Area)オフィスが管理し、エリアオフィスはゾーナル(Zonal)オフィスの監督下にある。最終的にはゾーナルオフィスが村から集まってきた全ての情報を本店に伝える。

2. グラミン銀行と一般銀行との違いは？

一般の銀行の場合、銀行はお金を持っている人に担保や保証人を通じてお金を貸す。そして、借り手が銀行に出向いて厳しい審査や手続きを踏まなければならない。一方、グラミン銀行はいかなる貧しい人でも金融機関からお金を借りる権利があると考えている。グラミン銀行の場合、一般の銀行にアクセスできない貧しい人々の尊厳を尊重した上で信頼して無担保でマイクロクレジットを提供している。そして、行員が自ら借り手の戸口へ行き、メンバーは簡単な手続きで融資を受けることができる。さらに、グラミン銀行の株主になれるのはメンバーのみである。グラミン銀行は法的な手段を持たず、信頼関係の上で成り立っている貧しい人々のための銀行である。

Box 1: グラミン銀行のユニークなアプローチ

グラミン銀行の審査に合格してお金を借りた後、初めて大金を手にしたため緊張して行員にアドバイスを求めてくるメンバーがいる。そういう借り手に対してグラミン銀行総裁ユヌス氏の教えは - “私達はお金をたくさん持っているが、いいアイデアは持ってない。もし、私達がいいアイデアを持っていたら、貴方にお金を貸さないでこのお金でもっとお金を儲けているだろう”。

* 世界銀行は貸すお金以上に口を出す、グラミン銀行は金を貸すが口は出さない。

3. グラミン銀行の歴史的背景

グラミン銀行総裁で創立者でもあるユヌス氏は米国で博士号を取得後、バングラデシュに帰国してチッタゴン大学で経済学の教授として教鞭を執るようになった。教室で学生に講義をしている時に経済学に関する多くの問題を黒板で理論的に解決できても、教室から一步外に出ると通り道に絶対的貧困に苦しんでいる人々が溢れている状況があった。そして、自分が教室で学生に教えている経済学が実際の社会にあまり役に立っていない事に疑問を持つようになり、ゼミの学生と一緒に大学近辺にあるジョブラ村で貧困の主な要因について調査研究を始めた。その結果、草の根レベルで極度に貧困な状況にある人々は彼ら自身の生活改善や自立の為に自発性は持っているが、お金を借りる為に担保になるものを持たないので金融機関にはなかなかアクセスできない事が明らかになった。その後、ユヌス氏は実行可能なバンクネットワークを農村の人々にもたらす可能性を探った。土地を持たない人々が適切な期間と状況の中で資金を運用できるようになれば、貧しい人々が自助努力を積み重ねて、とてつもなく大きな発展を遂げられるだろうとユヌス氏が考えた。1976年、この計画は「農村開発研究プロジェクト」と名づけられ、下記のような目的とともに形となっていった。

- 1) 貧困層に対し、農村銀行の整備を拡張する。
- 2) 貸金業者による貧困層への搾取を排除する。
- 3) 農村における莫大な未開発の人的資源に対して自ら収入向上活動を行う機会をつくる。
- 4) 教育を受けていない人達を何らかの形式を持った組織の中へ連れて行き、彼らにその形式を理解させ、利用できるようにする。そして、そこから相互協力を通して社会政治や経済の強みを見つけられるようになってもらう。
- 5) 昔の悪循環「低収入 低貯蓄 低投資 低収入」から発展的システム「低収入

クレジット 投資 より多くの収入 より多くのクレジット より多くの投資
より多くの収入」へと変える。

このプロジェクトは1976～79年にチッタゴン地方のジョブラ村周辺でその強みを証明した。その後、バングラデシュの中央銀行をスポンサーとし、他の国営銀行からも協力を得て、1979年北部のタンガイル地方に広がった。タンガイル地方で成功した後は、1982～83年にかけてグラミンバンクプロジェクトはバングラデシュの首都のあるダッカ地方、ランプール地方(最北端地方)、ポットゥアカリ地方(最南端地方)に広がった。1983年12月、農村開発研究プロジェクトは「グラミンバンク」の名で独立した銀行 (Grameen Bank) となった。

Box 2: わずか27ドルがグラミン銀行の始まり

ジョブラ村の女性達は仲買人から材料をもらって一日中、竹細工の作業をしても作業代として自分の手元に残るお金はわずかであった。自分達が材料を購入できれば竹細工の売り上げ全額が自分のものになり、収入も何倍にも増える事になる。ユヌス氏はこれらの女性達に注目してポケットにあったわずか27ドルを42人の女性達の竹細工の材料購入代として貸し始めた。これがグラミン銀行の始まりである。グラミン銀行はお金を貸すだけではなく、女性達に労働の機会を提供している。どんなに貧しくても人には何らかの技能があり、それを資本化して事業を起こす「起業家精神」が必ずある、というのがユヌス氏の考え方である。

4. マイクロクレジットとは？

グラミン銀行の実践が貧困対策として世界的な注目を集め、同様な小規模金融の試みが開発途上国のみならずアメリカなど先進国でも行われるようになった。対象者は数千円から数万円の資金融資を無担保で受け、それを元手に自営業などを開始、あるいは拡大して収入を増やし、自活していくことが期待されている。ユヌス氏がグラミン銀行を設立する前に、“マイクロクレジット”という言葉を目にしたことがあっただろうか？今はバングラデシュを始めとする世界中の多くの貧しい人々がマイクロクレジットの恩恵を受けることにより、人間としての尊厳をもって毎日の生活の中で最低限必要とされるもの(衣食住や基礎教育・保健医療など)にアクセスできるようになった。

1997年にアメリカ・ワシントンで開催されたマイクロクレジット・サミットでユヌス氏がマイクロクレジットは人権の1つであることを主張した様に、グラミン銀行の活動を通して有言実行している。さらに、ユヌス氏は現在、極度の貧困な状況に置かれている人達が貧しいのは彼達のせいではない、むしろ金融システムが複雑なために彼らがアクセスできないからである。いかなる貧しい人でもマイクロクレジットを受ける権利があるはずである。

5. グラミンクレジットの特徴

- 1) グラミンクレジットを人間の権利として推進する。
- 2) グラミンクレジットのミッションは貧しい家庭が貧困から脱出する為に手助けをする。対象は貧困層、特に貧しい女性達である。
- 3) グラミンクレジットの明確な特徴は無担保で法的契約を持たない、銀行側と借り手の間の信頼の上に成り立つものであり、法的な手続きやシステムの上で成り立つものではない。
- 4) グラミンクレジットは貧しい人々に自営業で雇用を生み出す収入向上活動とハウジングローンを提供している。

- 5) グラミンクレジットは貧しい人達にクレジットを拒否してきた従来の銀行に挑戦的で独自の方式や方法論で運営している。その結果としてグラミンクレジットは従来の銀行の基本的な方法論を拒否している。
- 6) グラミンクレジットは戸口でサービスを提供する。グラミン銀行の基本方針は人々が銀行に行くのではなく銀行が人々のところへ行くことである。
- 7) グラミンクレジットを受ける条件としてボロワー (Borrower) はボロワーグループに参加しなければならない。
- 8) グラミンクレジットは、以前のローンが返済済みであれば継続的に新しいローンを受けることが可能である。
- 9) グラミンクレジットではすべての貸付金は毎週、または2週間毎に返済される。
- 10) ボロワーがグラミン銀行から同時に 1 つ以上のローンを受け取ることが出来る。

6. グラミン銀行自身の経済的自立のために

グラミン銀行は融資を受けているメンバー (ボロワー : Borrower) に自立して貧困から脱出することを目指しているとともに、グラミン銀行自身も経済的自立のことを意識して行動するようになった。1995年、グラミン銀行は運営資金の為にドナー、国際機関、国内外の金融機関などに要請をしないことを決定した。1995年以降、グラミン銀行は財源の為に何処にも資金を要請していない。この間、グラミン銀行はボロワーや一般の人々から貯金を預かることにより資金面で巨大銀行となった。グラミン銀行はボロワーにマイクロクレジットを提供することにより自助努力で生活改善や収入向上のモチベーションとなっていると共に、銀行自身の自立の為に次々に新たな企業や NPO (特定非営利活動法人) を起こしている。これらの企業と NPO はグラミンファミリー (Grameen Family) と呼ばれている。その中でもグラミン銀行が設立した代表的な携帯電話のベンチャー企業「グラミンフォン」は南アジアのどの会社よりも多くの加入者を持っている。

7. グラミン銀行と女性のエンパワーメント

長い歴史や伝統の中で、農村社会では女性は家の中 (子育て、家事)、男性は外で (生活費を稼ぐ) 働くことが主流だった。そのため女性の社会的、政治的、経済的、文化的状況などを変えていくことは非常に困難であった。そのような状況の中、1983年にグラミン銀行が村にやってきた。初期の頃は家族をはじめ、村社会も女性と銀行との関わりに反対していた。しかし、グラミン銀行のモチベーションにより村の女性がマイクロクレジットに興味を示し、やがて家族の賛同を得て積極的に関わるようになった。貧しい人々が5人でひとつのグループを作り、グループの中でお互いに連帯保証人となり無担保でお金を借りるというシステムが採用されている。銀行のローンは毎週少しずつ返すことになっているが、返済率は98%と高い返済率を維持している。全体の借り手のうち97%以上は女性である。小規模融資を受けることで自分たちが昔から持っているインディジャーナス・ノウレッジ (代々親から子、子から孫へと受け継がれている知恵と知識) を活かしてアヒル、ニワトリ、ヤギ、牛などを育てたり、野菜の栽培をしたり、村で小さな店を開くなどして現金収入が得られるようになった。これにより、貧困削減と同時に家族の中で自分達の地位を確立できるようになった。

グラミン銀行から無担保でマイクロクレジットを受けることにより、女性達が経済的に自立し、さまざまな社会や政治活動にも積極的に参加することによって自分達が対等な立場で意志表示できるようになった。このようなことは今まで開発途上国の農村で暮らす女性の生活の中で考えられなかった。グラミン銀行は女性と開発、ジェンダーと開発という理論やアプローチより実践的に女性のエンパワーメントを通じて静かな革命を起こしているとも言える。

Box 3: 静かな革命

一般的にイスラム社会(バングラデシュ)では女性名義の財産がないことが多い。グラミン銀行のハウジングローンの規定では、借り手本人の名義に最低20㎡メートルの土地がない場合はグラミン銀行からローンを受けることができない。初期の頃マイクロクレジットへの参加に反対していた夫達は、今では親から貰った大事な土地を妻名義に変更することを拒まない様になった。これはイスラム社会のバングラデシュでは革命的なことである。村レベルでは政治的な面においても静かな革命が起きている。グラミン銀行のメンバーが直接選挙によって村長になった数は毎年少しずつ増えている。これらのメンバーが最近の総選挙でも大きな役割を果たすようになってきている。特に、グラミン銀行のメンバーが活発に活動している地域ではジャマティ・イスラミ党(イスラム原理主義)の国会議席が毎年減っていることが明らかになっている。

8. 携帯電話と貧困削減

近頃では携帯電話は私達の日常生活では必需品となった。バングラデシュではグラミン銀行は携帯電話を貧困削減の手段として利用している。グラミン銀行が起こしたビジネスエンタープライズの中で携帯電話会社(Grameen Phone)が最も注目を浴びている。1996年、グラミン銀行は日本の丸紅とノルウェーのテレノールとでベンチャー会社を設立した。Grameen Phoneはわずか10年間で1,000万人以上の加入者にサービスを提供し、南アジアで最大の携帯電話会社となった。そして、グラミン銀行の100万人のボロワーが固定電話の普及していない農村部で Telephone Ladies としてビジネスを展開し、高収入を得て貧困から完全に脱出するようになった人も少なくない。Telephone Ladies の中に月収が大卒の初任給料より多い人も最近では珍しいことではない。数年前、早稲田大学での講演後、ある教育研究者がユヌス氏に次のような質問した。“読み書きすら出来ない農村女性に最新技術を持たせて、どうやって商売が成り立つのですか？”この質問に対してユヌス氏の答えは - “これはそれ程難しい問題ではない。電話をかける為に10桁の数字を覚える必要はあるが、それを農村女性に教えれば Telephone Ladies の事業が成り立つはず。”グラミン銀行のファミリー企業は既に全国レベルでコンピュータ(IT)教育を展開してきた。最近では農村部の多くの中・高生が利用できるように村レベルでインターネット事業を促進している。

9. グラミン銀行の成功の秘訣

- 1) グラミン銀行の規則(16原則)やシステムを借り手が厳粛に守っている。
- 2) 5人で一つのグループと毎週の返済が小規模融資に機能的に活躍している。
- 3) 借り手(メンバー)のニーズと状況を把握してマイクロクレジットを貸し付けている。
- 4) グラミン銀行は行員より借り手の方が融資の使い道を知っているからいちいち口を出さない。
- 5) 貸付後のメンバーに対する行員の透明性(Accountability)と親身なモニターリングが機能している。

10. グラミン銀行はボロワーの貧困状況を下記の10項目を指標として評価している

毎年グラミン銀行の行員は彼らの仕事とメンバーの社会的・経済的な状況に改善があったかどうかを調べる。グラミン銀行はボロワーの貧困状況を評価する為に下記の10項目を指標として評価する。グラミン銀行のメンバーの家族が下記の基準を満たせば、そのメンバーは貧困から脱出することができると考えている。

- 1) 家族が少なくとも400ドルの価値のある家に住んでいるか、あるいはタン屋根のある家に住み、家族全員分のベッドがあること。
- 2) 家族全員に掘り抜き井戸から汲み上げたきれいな水や煮沸かみょうばんで消毒した水、錠剤やフィルターでヒ素を取り除いた水へのアクセスがあること。
- 3) 6歳以上の子ども全員が小学校に通っているか、小学校を卒業していること。
- 4) ボロワーの毎週のローン返済額は200タカ以上であること。
- 5) 家族全員が清潔なトイレを利用すること。
- 6) 日常生活で使う家族全員の冬物の衣類(ショール、セーター、毛布など)や蚊から身を守る為の蚊帳を不足なく持ち合わせていること。
- 7) 家族に何かあった時に使えるよう、野菜や果物などを栽培して副収入源を持つこと。
- 8) ボロワーは年間通して平均500タカの貯金を持つこと。
- 9) 年間通して家族全員が問題なく三度の食事を摂っていること。例えば、1年間、家族の者が空腹を経験していない。
- 10) 家族の者が病気になった時に医療機関のサービスを受けられると共に治療代を支払えること。

Box 4: グラミン銀行中毒!

一般的にアルコール中毒、麻薬中毒という言葉は耳にしたことあっても、恐らく銀行中毒という言葉は聞いたことはないだろう。グラミン銀行が創設して30年の月日が経過した。この間、グラミンクレジットを受けて失敗した借り手もいるが、成功したボロワーの数の方が圧倒的に多い。それらの成功者に「生活の改善と収入向上ができて自立しているのに、なぜ今もグラミンクレジットを受けているの?」と訊くと、「グラミン銀行から融資を受けなくても十分にやっつけられるが、毎週のセンターミーティングに(毎週の返済日)参加しないと生活のリズムがおかしくなるから、必要なくても毎週のセンターミーティングに出る為融資を受けている。グラミン銀行中毒だよ!」

11. グラミン銀行(ムハマド・ユヌス)が変えたバングラデシュのイメージ

ユヌス氏は言う、「一人の人間が強い希望を持って目標に向かう努力をすれば地域社会、国や世界を変えることができる、もしそれを出来なくても絶望する必要はない、一人の人間が一人の人間に対して何かしらできるだろう、それでいいのではないか。」まさに有言実行できる者の表現そのものである。ユヌス氏はアジアの最貧困国の一つと言われているバングラデシュという国のイメージを変えた。「バングラデシュのイメージを変えてくれたユヌス氏、国にとって宝物」である。つまり「貧困にあえぐ国バングラデシュ」というイメージから「貧困削減のために戦略を持っている人々が勇気をもって立ち向かっている希望に満ちた国」。今はアジア、アフリカ、ラテンアメリカなどの多くの国々や開発援助機関が貧困削減のためにグラミン銀行の方式を取り入れるようになった。30年前、マイク

ロクレジットという言葉の存在すらなかったが、今では世界中から多くの政策立案者、開発協力分野の従事者、研究者、大学関係者(教員・学生)が Grameen Bank Model について学ぶために毎日のようにバングラデシュを訪れている。グラミン銀行のアプローチはアーカンソー州知事時代のクリントン前米大統領によってシカゴに導入されたのをはじめ、現在、国境を越えて60カ国以上で導入され、今、その実績は世界が認められるようになった。2006年にはグラミン銀行とムハマド・ユヌスがノーベル平和賞を受賞している。

12. 物乞い(Beggars)がグラミン銀行のメンバーになった

グラミン銀行は世界的に注目されていると同時に国内において共産党、イスラム原理主義や一部の学者・知識人などから様々な批判を受けている。その都度、それぞれの批判に対してユヌス氏始めグラミン銀行の関係者はグラミン銀行の理念と思想に基づいて説明してきた。時にはチャレンジを受けたこともある。共産党は貧困層が銀行から恩恵を受けて最低限の生活ができるようになると革命を起こしにくい。イスラム原理主義の視点で物を考える人達は、グラミン銀行が活発に活動をすればするほど女性のエンパワーメントがこれ以上に進むと彼らにとって面白くない都合が悪いようである。もちろん、これらの批判に対してグラミン銀行側が逐一反論するのは時間の無駄だと思って無視したこともある。数年前から新たな批判として出てきたのは、グラミン銀行は貧者の銀行というが、絶対的貧困の状況に置かれている人々のためには何もしていないじゃないか？グラミン銀行はこの批判に対して挑戦をすることにした。バングラデシュでは一番貧しいと言われる人達は物乞いをして生活している人達である。グラミン銀行はそれらの人達を対象に小規模融資提供をするようになった。物乞いを対象としたグラミン銀行のプログラムで融資を受けているメンバーは10万人を超えている。

このプログラムの特徴は下記の通りである。

借り手はグラミン銀行の規則(16原則)やシステムの対象になってない(守る義務はない)。

全ての融資は無利子である。返済にも期限は決めてない、本人が返済したい時でいい。

物乞いをしている人達は自己負担なしで生命保険とローン保険に入っている。

グラミン銀行のグループやセンターに物乞いをしている人達のパトロンになるように推薦している。

全てのメンバーにグラミンのロゴの入っているバッジを持たせている、このバッジが彼をグラミンのメンバーであることを証明する。

グラミン銀行側は物乞いしている人達に辞めるようなアドバイスはしない。かわりに副収入を得られるよう努力することを進めている。

13. ムハマド・ユヌスの新たな挑戦: 貧困を博物館へ

ユヌス氏は言う。“私が貧困と関わりを持ったのは、政策立案者としてではなければ研究者としてもない。私の回りにあった貧困の存在が無視できなかったからである。経済学の授業では素晴らしい理論、黒板の上ではどんな難しい問題を簡単に解決できても、それらは現実にバングラデシュの飢餓、貧困問題に何の解決にもならなかった。教室で教える経済学の優れた理論ではなく、例

え一人の困っている人を手助けできればよいと思って直ちに行動を起こすことを考えてこの活動を始めた。”

1960年代の「トリックル・ダウン(下の方に浸透していく)」アプローチと1970年代の半ば頃から、アメリカや世界銀行などによって貧困層の生活改善を直接のターゲットとした「ベーシック・ヒューマン・ニーズ(BHN)」のアプローチが開発途上国の貧困削減に大きな役割を果たせたとは言えない。1980年代、ユヌス氏がバングラデシュで設立したグラミン銀行のマイクロクレジットアプローチは現在、バングラデシュだけではなく、今やアジア、アフリカ、ラテンアメリカなどの多くの国々で貧困削減のツールとして浸透して、世界中から注目されるようになった。

1980年代初め、グラミン銀行が設立当時のメンバーのターゲット目標は200万人だったが、今現在700万人を超えている。銀行の16原則のお陰でメンバーの子ども達皆が学校に通えるようになった。優秀な子どもはグラミン銀行から教育ローンを受けて医者、弁護士やエンジニアになっている人も少なくない。グラミン銀行は以前から農村においてIT教育も推進している。ムハマド・ユヌス氏はオスロでのノーベル平和賞の受賞式でも今抱いている夢について語っている。今までは貧困なき世界を目指してきたユヌス氏は、今後次世代に日常生活では貧困を見られないようにしたい。将来、かつて先祖が苦しんでいた貧困の状況を彼らは博物館に行って勉強をすることにしたい。ユヌス氏はそれをただの夢物語ではなく、皆がそれに向かって努力すれば実現可能だと考えている。

この考え方と制度は、今や国境を越えてインド大陸からアジア全域、中東、アメリカ、中南米へとひろがっている。このようなムハマド・ユヌス氏の業績については、すでに「アジアのノーベル賞」と呼ばれているマグサイサイ賞はじめ、日経アジア賞など数々の国際的な賞を贈られている。ユヌス氏の業績については貧困を民主主義と人権を否定するものとして捉え、それからの脱出のため、人々の人間性と尊敬に依拠した「マイクロクレジット」という手法を作ることにある。オスロのノーベル賞委員会は今回のユヌス氏の平和賞受賞理由について、このように述べている。「持続的な平和は、大多数の人々が貧困から脱出する道を見出さないかぎり達成され得ない。民主主義と人権の前進にも役立つものである。」

14. ソーシャル ビジネス エンタープルーザールと貧困削減

最近、ユヌス氏がSocial Business Entrepreneur(社会的ビジネス起業家)の育成に一番力を入れている。開発途上国では工業・産業が発展してないことから、雇用の機会が少なく教育を受けても中々仕事が見つからないのが現状である。グラミン銀行は融資を受けているメンバーだけではなく一般の人々に対しても「仕事を探すのではなく、自らエンタープルーザール(起業家)になって仕事を生み出すことを進めてきた。」既に、銀行の多くのメンバーが事業を拡大して農村部において地域の人々に様々な分野で雇用の機会を提供するようになった。昨年、Grameen-Danone Foods というソーシャル ビジネス エンタープライズがベンチャー会社として設立された。この会社の目的は、バングラデシュで栄養不足で成長が困難になっている子供の親(低所得者)がアクセスできるように食品の値段を設定し、そして利益は地域コミュニティの人々が共有できるようにデザインした。企業の社会的責任とも言える。有言実行するユヌス氏が2006年、オックスフォード大学のビジネスス

クールで”Social Business Entrepreneurs Are the Solution”というテーマで講演をした。この講演はオックスフォード大学ビジネススクールの関係者以外の経済界にも大きな反響があったようだ。先日、世界的な有名な雑誌 Business Week がユヌス氏を“**The Greatest Entrepreneurs of All Time**”として評している。

参考文献:

<http://www.grameen-info.org/>

<http://www.grameen-info.org/dialogue/index.html>

Jamadar, Naseer U, 「The Emergence of Credit in Development」 Journal of International Development Studies, Vol. 5, 1996, pp.102-122

Yunus, Muhammad. 「We Can Put Poverty into Museums」, 2006 in Oslo, Norway

Yunus, Muhammad. 「Social Business Entrepreneurs Are the Solution, 2006 in Oxford University, United Kingdom.

Yunus, Muhammad, 「Grameen Bank at a Glance」 2007, Dhaka, Bangladesh.

国際開発ジャーナル 「国際協力用語集」 (2004年)

白崎 [編集] 「AIESEC Report 98/99」東大委員会YDEP事業部